



新刻奇談

12

~ 13
3378
4



13
3378
4

中
...
...

大
...
...

...
...
...

教
...
...

目録

一 和泉屋方燈籠の事

一 小泉屋方見入の事

一 附録六石揃の事

一 添六法論後の事

一 附法仕立の事



五十年八月廿九日
本大學出版部 贈

- 一 乙種にてたせを存ぞんの事
- 一 和泉を出生しゅつじんの事
- 一 附和泉を身代みしろたしるの事
- 一 海うみに死し去しお秀ひで子こ恨うらみをいふ事

鞍馬寺決巻之四

和泉を方惣かたむね礼れいの事

ねも和泉わいづを方かたとらりお志こころ目めとて聲こゑ
 半な良ら子こ来きりて由よし子こ惣むね礼れいおのりあるは
 一家いけ親おやるん皆みな一いつ集あつり旅たびと交ま
 料理りょうりの支し交か勝かつ手てと人ひとの山やまをか
 毛け子こき門かど一いつ色いろささ色いろささあありて幸さい后ご帝てい
 長なが之の傍かたわら葉は内うちへ来きりささりそく

親子の對面——さうすもお済るん
一家えんも皆く出て知人よ
うと料理もめて目かなる早めさく
さよ主婦のそ敷の代をさるそ
祝し近は憐れあちど心易き
人くよをりめをらめを句——
酒料理をむし婦のあひ早内
明の江のしし内意小をえく
の池ま子秋菊の葉の青きあよ
入る水と燈籠の冠式殿のあちく
こりはくろい望のそも済さん
あめ枕のうし同枕の笑り死智巻
の婦すまの下し階巻の正の巻
そめ妹脊のあちらいつそ目か
さほそ家内もみあしるろ
碎のち機あんとて雲もお伴

じほ子すみあれを大のえらと心
付と皆く休而子入と休とあり

小森河六知泉屋見入申

所 河六石捕り申

河六と日とをの替へてあつて一日
子秋のあじと素へ休兼たり

廿八日子あつてあれとあきよとあじ
あつろせ流へてあなをわん
ゆとをり人目を志のぬるあれと

を人へを心替へてあなをわん
先是への大小路とをゆりを

月行を能かると先今正月へて
恨みへをまゝさんと休へけりか子

しや秋子入るれと夜食はるを
まゝのえらと大はるれと大を

わて七八はるれとあつて下よ

後帷子を忌^{ちか}——小^こ子^こを忌^{ちか}神^{かみ}を
をさ——序^{しり}神^{かみ}の小^こ神^{かみ}を忌^{ちか}——
あ神^{かみ}を切^き切^きし——尾^{しり}を忌^{ちか}——
も志^し——後^{ちか}の神^{かみ}あき引^ひ志^しあ
子の別^{わか}子^こ宅^{たく}を也^や葉^は内^{うち}知^ちり
——之^{これ}降^{くだ}けり——志^しのびりづる
た八^{やち}りめる子^こお水^{みづ}をりまぶ月^{つき}も
あ——辰^{しん}まいのやこ心^{こころ}のやこめ
もまき座^ざらぬ一寸^{いちじゆん}先^{まへ}も足^{あし}くこめ
も精^{せい}勝^{しょう}をさんぜんと忌^{ちか}ひぬ——
一^い節^{しやく}の心^{こころ}ゆくたど——
座^ざらぬ——己^{おのれ}の別^{わか}己^{おのれ}の神^{かみ}を忌^{ちか}ひぬ
白^{しろ}水^{みづ}をら裏^{うら}の才^{さい}へ志^し心^{こころ}もあ
心を忌^{ちか}ひぬ——何^{なん}ぞ子^こ家^か内^{うち}を
忌^{ちか}ひぬの志^しも麻^あ入^{いり}なるあ水^{みづ}を
忌^{ちか}ひぬも——世^よもひつ志^し——

結りひねり六時
板塀へ手を付けえよう
是一子業上は切りしとび

向の者を席小利ふ切て是を
見方表へ出してつらやう方を

いふ所機るんめ入る
つたに望くたき者好とる

長之清原とす付て誰れとも
有るやあると只今小利子か

早所へに見しに裏の板塀の
上子盗人立居るが塀の内へ

飛入いひまよの人教らるる
心とる飛入とやましく見さ

るゆへに知るを中へといふ

長を清くやうに能く知るといふか
まはげん外をも氣を解くべしと
あるを悔し家内をおおし
あるを清くおどろきさむぎに
先批行をこぼし子よ梅
引さげて喜めは坪の肉を
石水と書きかゝるをしよ遠
はず大の罪屋の中を三層
の心とま築くち殺しとあり
しりある水と油六かをまじりぬい
ふに能くやうにうるにほ
をくきりなばるを切しせん
大のやうあるをしよし
アある水と刃ごもあきよあはし
ちりきよきよきよきよきよきよ
早月めりのいよ内をえしよきよ

龍のどく子早やちきあふれと
海も一生を命一見悟を
きゆえやとくまに又人よ心を
身をく水まこちくあまほをまき
しとちえさうれく評候一
かなりあく新くあれをあ
補ふししそち既じあ役人
中実の別しとま見くのと

實も早内の新への通り
大の男に天人の力を極ひて
ま店くく心真に又人さうと
弱しき強切ちく役人もむきと
くまのりばまむく見人台を
店のみし糟をたき清とまのり
沙弓柄めりさうをたもま句い
あれを流去と力を八相よ

宇ひしをききて己人合に候し
うらふ人近後八番といふか
実格をもつて流しをく
身と法をとりぎあるを何
ゆつとた多し
なりしを稽正するに
おきく
後生捕を候へ

海六法論後の事

所法仕直の事

舟中彼人中海を
もや
法論後
を
候し
候し

たゞぎの雨々從心を去つてたて
ふ丘原を礼して我體を教へ
なきまきさひかくして若ら子の心
清毒ゆくう切あり申すをもたせ
をんして太死を二地申す
ある凡末代悪名をハ張し
何としてよりましくくさ後人
廻るを志つてはむし

云 破すをたてを存の事

流六に上のかれむきいふも 忍七
流斗に上を流六を歎き 普賢の
聖子を奉じ 忍又切秀おも 歎き
一 返 お知也 忍れを 忍他
子 忍れ 忍れ 忍 忍 忍 忍 忍
十人 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ
出 一のめを 實子 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ 忍れ



清さときこう様をころころとあそび

和泉屋出産の事

所いつこや元代義徳の事

強六盗賊に極つて法仕をとりつ

事 後志しつれをいつらやを

何めわりちいもろくお所高貴

すんく整器し日く景く

あるがわき年の名より男子

出産しお親をゆりあゆむ悦び

ち方ろくぐ籠屯しあるある和泉

や秋の使物に鶴を換えり又

手代ももの川原多し泉より

屋敷方のうけ先の百遠おもしろ

其外相寄る名を志し手代も遠

中より名原ちどししに巳年の

石し元と所の外ゆとろくおゆめ

鹿皮も割る心して商賣し
あるは兎角枚多し出ても元
と云わくは鶴と鹿皮やそら
も心裏の片は小き信店と云ふ
い親も又人ぞくしある縁幸に
今年何りあるか秀が住す候
例に於て居るが秀や
とそあると誰か解してや
見若しき教色は生かす
もかたもこし人ぞ知し
あるももらきよゆ白しき教色
あり候し指も一本たぬ
生かす親の教色はよ
いのある因果をわく生かす
おと中なる水は其付かた
うすかたはわく切た

柳とおき傍のふくおくくふふか
ま中たふはとやある。

海六が死いし買かひお秀ひで子こ恨うらみと云い事こと

け時おひごを想おも身みせつと一しと
立たつぐとあんとほるよ幸さいと
お秀ひでが恨うらみをくまこころいふ
とびこふつまらふ人トやのふ
あまこをちとこし際さかいト

縁ゆかり合あをもお忘わすれはたおれのせり
うけの目よほつて房むらこすま
はソヤ多おほのあひあひ葉は葉はのく
むしぬ房むらのつらも己おのれま
うたや一ひとまあく匠たくみをかこ
とせりして肌はだをかくく飛とびたを
かゝる仇あだなる川がははかゝるもらん
こゝろ白しろも巧たくみくく海うみの深ふかさ

流きおひとらや命一はまにまてし思ふ
心あせまにまぬらうとあひひを胸は
碎くくちりしりしらたせうらう
次こそ舟を雇きまがしと心うせし
く男あうめと心実をえをよもの
函より父舟の血筋の指を切て
養へし是を志美め申うたれ大
そよ病を志のまふ自中さくも
いとくちしむるうらう是よりとあし
うらきるのよとあしこのりあは
いのよもつ返るやせんとあるや
そよのよみ存しよまの器あをあし
父ししとある是よとあも由
ちしらにあを志美を胸は
あちしとあひて武士しとあ
あちしとあ親のあはれもまふ

をあらはしむれば恨をもちとさんとれぬ
ぢんごうごうごうごうごうごうごうごうごうごう
なごうごうごうごうごうごうごうごうごうごう
恨をかきぬ何れ共け家をほらひん
と赤袴そのお仕合は皆家おとち
あなりそのうへに家は家と生連来
うせのそそのおこの例は係伏あさん
生連せうりりやちうごうごうごうごうごう
う翌日いりりきをあらうごうごうごうごう
いりりごうごうごうごうごうごうごうごう
まごうごうごうごうごうごうごうごうごう
呉香よおよひ今日までほいひひひ
ごうごうごうごうごうごうごうごうごう
乃うごうごうごうごうごうごうごうごう
年月五ごうごうごうごうごうごうごう
なごうごうごうごうごうごうごうごう

